

フランス語のリエゾンについて

青 井 明

0. はじめに

本稿では、1) まず、フランス語のリエゾン (liaison) を一般言語学的見地から、位置づけ、2) つぎに、リエゾンの起きる条件を探り、3) ついで、フランス語のリエゾンの実際を、散文の朗読と日常会話をもとに記述し、4) 最後に、まとめを述べることにしたい。

1. リエゾンとは

一般に「リエゾン」というと、les enfants [lezãfã] のように、単独では発音されない語末子音字が、母音が後続するときに発音される現象とされ、フランス語に典型的なものと思なされることが多い。しかし、この現象は、一般言語学的見地からすると、古インド文法における、サンディ (sandhi) に相当する。これは、語中や文中で音が連結することで、「連声」とも呼ばれる。『新英語学辞典』には次のように説明されている：

(……) 文中において連続する単語、または複合語の構成要素間に起こる音変化で、
(……) 単語の派生または名詞・動詞の屈折に際して語根部とか語幹部と接尾辞・語尾との間に起こる音変化 (……)。¹⁾

このように、フランス語のリエゾンをサンディの1種と見なすのは、Wilmet も同様である²⁾。Wilmet によれば、アンシェヌマン (enchaînement) もリエゾンとともにサンディに含まれる。ちなみに、アンシェヌマンとは、発音される語末子音が、後続の母音と連続することである。たとえば、avec elle [avɛkɛl] のように、avec [avɛk] の語末の [k] が後続の母音に連続する。この場合、音節に区切ると [a-vɛ-kɛl] になる。

このように考えると、リエゾンに似た現象はほかにもあることに気づく。たとえば、英語で、「連結の r」(linking r) と呼ばれる現象がそうである。一般に、語末の r は発音されないか、ほとんど発音されないものであるが、母音が後続すると発音されるのである。たとえば、far は単独では、語末の r はほとんど発音されないが、far away [faɪrəwei] では r が発音される。同様にして、father の語末の r はほとんど発音されないが、father and mother では、発音される。

また、イタリア語のピエモンテ方言では、過去分詞の語尾の -ita と半過去の語尾の -wa が

ともに、-iaではなく、-iyaになるといわれている。これなどは、-iaという母音連続を避けるため、口蓋の半母音が挿入されたものと考えられる³⁾。

以上のように見てくると、リエゾンは「フランス語に独特のもの」⁴⁾であるとは、到底いえない。たしかに、リエゾンはフランス語の典型的な現象として、言及されることが多いが、実際にはこのような現象はほかにも多々起こるのである。

2. リエゾンの起こる条件

ここで、リエゾンの起こる条件を観察してみよう。さまざまな文法書、辞典のリエゾンに関する記述は大同小異で、大差がないが、代表的なものとして、朝倉季雄の『新フランス文法事典』を引用してみる：

無音の子音で終わる語に母音で始まる語が続くとき、無音の子音を発音して次の語の母音に連結すること：vou(s) zavez⁵⁾

おおむねこの定義でよいが、細かいことを述べれば、「母音で始まる語」には、「無音のhで始まる語」も含まれる。フランス語には2種類のhがあって、1つは「無音のh」、もう一方は「有音のh」と呼ばれる。前者は、たとえば、les hommes [lezɔm]のように、リエゾンを起こすが、後者では、les Halles [leal]のようにリエゾンを起こさない。

この定義で、大切なことは、無音の子音字が、母音が後続したときに発音されるということである。いくつかの文法書や参考書には、neuf [nœf]の語末子音の[f]が[v]と発音されることをリエゾンとしているが、これは、上記の定義からすると、リエゾンには当たらない。これは、無声音の語末子音が有声化したものであって、語末子音は最初から発音されているのであるから、アンシェヌマンと見なさなければならない⁶⁾。neufの音声環境による分布を示しておこう：

単独で	neuf [nœf]
母音の前で	neuf heures [nœvœ:r]
子音の前で	neuf personnes [nœfperson]

ほかの数詞 cinq, six, dix などでも、cinq enfants, dix amisなどをリエゾンとしている本があるが、これらもちろんリエゾンではなく、アンシェヌマンである。

なお、リエゾンの目的について、「これによって、語の連続により生じる母音衝突を避けることができる」と述べているものがあるが⁷⁾、これは必ずしもそうとも言い切れない。たしかに、les amis [lezami]のような場合には、母音連続が阻止されるが、dort-il [dortil]のような例では、発音されるtは子音に先行されていて、母音連続にはなっていない。

ここで、リエゾンの起こる条件をまとめておくと、「単独では発音されない、語末の子音が、母音、および無音の *h* で始まる語が続くとき、発音される」とすることができる。

さて、リエゾンの起こる条件として、Bonnard はアクセントを担った語は次の語とリエゾンしない。それに対して、アクセントを持たない語は後続の語と容易にリエゾンすると言っている：

un mot portant l'accent tonique ne se liera pas au mot suivant, un mot dont la finale est inaccentuée se liera facilement avec le mot suivant ; ⁸⁾

そして、次のような例を挙げている：

- a) Un bon élève
- b) Une liaison étrange

a) では、bon にアクセントがないので、élève とリエゾンするが、b) では、liaison にアクセントがあるので、étrange とはリエゾンしないとしている。

この Bonnard の説を受けてであろうか、目黒士門も次のように述べている。

(……) リエゾンはアクセントのない語からアクセントのある語に向かって行われる。アクセントのある語（リズム段落の末尾）からアクセントのない語に向かってリエゾンしてはならない。⁹⁾

リエゾンの起こる条件として、アクセントの有無をあげているのは、これだけであるので、注目に値する。しかし、はたして、アクセントがリエゾンの成立に関与しているであろうか。Bonnard の a) の例をもう一度見てみると、これは、形容詞に名詞が後続している例であり、たしかに bon にはアクセントがない。b) の例は単数名詞に形容詞が後続している場合で、これはたしかにリエゾンが禁止されている場合である。しかし、Une liaison étrange で、liaison にアクセントがあるのだろうか。普通は、リズム段落の直前の音節にアクセントが置かれると考えられる。大木充・東郷雄二の『目で見えるフランス語発音入門』には、admirateur では -teur に、japonais では -nais にそれぞれアクセントがあるが、l'admirateur japonais になると、japonais の -nais にアクセントが残るとしている¹⁰⁾。この点からすると、Bonnard の b) の例では、étrange の -tran にアクセントが移動するはずである。

語が連続した場合、どこにアクセントが置かれるかについて、中田俊介は次のようなデータを示している。J'aime le carnaval musical de Saint-Denis. という発話を音声分析すると、le carnaval musical の部分では、carnaval の -val, musical の -cal にそれぞれアクセントがある

が、musical のアクセントの方が周波数が高いのである¹¹⁾。この例は、リエゾンを起こす例ではないが、語が連結する場合のアクセントについて示唆を与えてくれる。

このデータは非常に興味深く、一見すると、Bonnard の説を裏付けるようだが、よく見てみると、やはり、語が連結すると、2 番目の語のアクセントの方が強く、高いことがわかる。Bonnard がいうように、Une liaison étrange で、liaison にアクセントがあるというのは、liaison と étrange の間に心理的にポーズがある場合であろう。つまり、Une liaison といって、それに étrange を付け加える場合である。この際には、liaison の -son と étrange の -tran にそれぞれアクセントがつくはずである。もし、Une liaison étrange が一息に発音されるのであれば、étrange の -tran の上にアクセントが移動するはずである。

そして、この Bonnard 説で問題になるのは、「複数名詞＋形容詞」の間で、リエゾンが起きる可能性があることである。たとえば、des liaisons étranges は、日常会話ではリエゾンをしないが、改まった講演や朗読では、リエゾンが起こるケースである。Bonnard の説では、このリエゾンを説明できないことになってしまう。したがって、結論としては、「単数名詞＋形容詞」のようにリエゾンが禁止されている場合を、アクセントの有無だけによって説明するのは、無理であろう。

3. リエゾンの実際

次にリエゾンの実際を観察することにする。リエゾンといっても、文法書や参考書に挙げられているようなリエゾンがすべて起きるわけではない。一般的に言って、演説・詩歌・散文の朗読では多く行われるが、日常会話ではしだいに少なくなる傾向にあるといわれている。そして、会話でもくだけた会話より、改まった会話の方がリエゾンが多い。

そこで、本稿では、まず、改まった場合として、散文の朗読を取り上げ、Antoine de Saint-Exupéry の *Le Petit Prince* を資料とすることにする。これは、Bernard Giraudeau による朗読である。テキストは Gallimard 社刊のものを使用する(1965 年版)。つぎに、くだけた日常会話体のものとして、Patricia Biggs, Mary Dalwood, *Les Orléanais ont la parole*, Longman, 1978 年のテキストを分析する。

3.1. 散文の朗読におけるリエゾン

では、まず、散文の朗読の中でリエゾンする例を挙げていくことにする。例の後の数字はページ数を表す。なお、リエゾンする箇所に [_] を付すことにする。

a. 限定詞＋名詞、限定詞＋形容詞＋名詞

限定詞は定冠詞、不定冠詞、所有形容詞、指示形容詞、数詞を指す。

Tous les_hommes (37), un_admirateur (42), des_additions (42), mes_amis (24), ces_étoiles (47), trois_arbustes (24), de_bonnes_herbes (22), comme un petit_enfant

(86)

b. 副詞 + 形容詞 (過去分詞)

副詞は *très, trop, plus, bien, tout* など。

C'est très_utile. (10), *trop_impressionnant* (12), *plus_important* (29), *bien_obéi* (40), *tout_entière* (9)

c. *pas, jamais* の後

n'a pas_eu un ami (20), *La terre n'est pas_une planète quelconque !* (58), *je ne suis pas_explorateur* (54), *Je ne suis pas_apprivoisé* (67), *mais je n'ai pas_encore* (76), *ne plus jamais_entendre* (86)

d. 前置詞 + 名詞句

前置詞は *après, dans, en, sans* など。それから、前置詞と冠詞が縮約したものとして、*aux*。

après_un silence (77), *dans_une rêverie* (16), *En_effet* (26), *sans_inconvénient* (24), *aux_étoiles* (49)

e. 主語代名詞 + 動詞、動詞 + 3 人称主語代名詞

主語代名詞は *nous, vous, elles, on* など。

Nous_écrivons (56), *vous_imaginez* (1), *elles_apparaissaient* (30), *on_exige* (55), *peut-il* (37), *dit-elle* (34), *servent-elles* (27)

f. 主語代名詞 + 補語代名詞 + 動詞、中性代名詞 *en* の前後で。

Il les_interroge (55), *peut les_éteindre* (78), *Nous_en_étions* (76), *il y en_a* (18)

g. 動詞の後で。

動詞に後続する語は多様で、冠詞、副詞、前置詞、形容詞などである。

Je suis_un renard (67), *il dit_encore* (77), *revint_à son idée* (68), *J'étais_heureux* (81)

h. 接続詞 *mais, puis* の後。

Mais_il n'y a personne (40), *Puis_il redevint sérieux* (88)

i. 接続詞 *quand*、関係代名詞 *dont* の後で。

quand に後続するのは、人称代名詞 (*il* など)、不定代名詞 *on*、不定冠詞 (*une* など) である。

quand_il aperçut (15), *Quand_on a terminé* (24), *quand_une drôle de petite voix* (11), *dont_il* (60)

j. *c'est (c'était)* の後で。

c'est に後続する語も多様で、冠詞、形容詞、副詞、代名詞などである。

c'est_un avion (15), *C'est_exact* (54), *C'est_ici* (95), *C'est_elle* (72), *c'était_une fleur* (36)

k. 成句・熟語

tout_à fait (12), peut-être (18)

3.2. 日常会話におけるリエゾン

次に、日常会話におけるリエゾンを観察することにする。資料として、上記の *Les Orléanais ont la parole* を用いるが、これは、オルレアン在住の 27 名のフランス人に、1-3 分間のインタビューをしたものをトランスクリプトしたものであり、リエゾンの箇所には [_] が、リエゾンの可能性があっても、リエゾンしていない箇所には [x] の記号がつけられている。

本稿では、3.1. と同じアルファベットを用い、例を挙げていく。例の後の数字はページ数を示す。

- a. 限定詞 + 名詞、限定詞 + 形容詞 + 名詞、名詞 + 形容詞
les_heures (26), des_appartements (25), deux_os (121), comme les_autres (44), les
grands_ensembles (25), différentes_opérations (109), à mon_avis (98)
- b. 副詞 + 形容詞 (過去分詞)
très_étendus (16), bien_illuminée (39), plus_élevé (63), moins_agréable (79), tout_en
ordre (90), la plus_ouverte possible (98), on l'a bien_appris (118)
- c. pas の後
il n'est pas_exclu (80)
- d. 前置詞 + 名詞句
dans_un sens (19), en_usine (108), sans_histoires (30), devant_eux (31), en_arrivant
(19), aux_enfants (98)
- e. 主語代名詞 + 動詞
nous_avons (50), vous_allez (43), ils_auront choisi (98), on_habite (25), on_a remarqué
(26)
- f. 補語代名詞 + 動詞、中性代名詞 en, y の前後。
pour les_obtenir (54), avant de les_amener (109), je vais vous_expliquer (61), la société
en_a payé (79), nous_en_avons (108), vous_y seriez fourré (79)
- g. 動詞の後で。
je suis_allé voir (103), est_équilibré (19), qui est_un relief (19), sont_attachés (26),
est_obligatoire (108), est_une ville (30), est_électricien (117), on peut_avoir (98)
- i. 接続詞 quand、関係代名詞 dont の後。
quand_on est jeune (75), quand_il faut payer (76), dont_ils ne retiennent (118)
- j. c'est (c'était) の後で。

c'est_une région (19), c'était_une ville (30), c'est_assez curieux (40), c'est_un peu spécial (62), c'est_entretenu (67), c'est_apprendre à faire (98), c'est_à voir (39)

k. 成句・熟語

peut-être (25), c'est-à-dire (54), petit_à petit (30), de temps_en temps (67), de plus_en plus (80)

3.3. 日常会話で、リエゾンできるがしない場合

最後に、日常会話で、リエゾンできるのにリエゾンしていない例をあげることにする。この例は日常会話の特徴ともいえるべきもので、詩や散文の朗読では、当然リエゾンするような場合でも、リエゾンしないものである。*Les Orléanais ont la parole* のテキストでは、[x] の記号が使われているが、ここでは、[/] の記号を使うことにする。

a. 限定詞 + 形容詞 + 名詞、名詞 + 形容詞

この例はそれぞれ 1 例ずつのみ。

un gros/os (121), les normes/officielles (63)

c. pas の後。

ce n'est pas/une région (19), ils ne sont pas/excessifs (19), il y a pas/un chat (35), beaucoup ne peuvent pas/en dire (58), n'arriverait pas/à avoir (70), ils allaient pas/avoir (76), ils n'en ont pas/assez (114)

d. 前置詞 + 名詞句

depuis/un siècle (43), pendant/un siècle (43)

e. tout の後。

この例も 1 例のみ。

tout/est bousculé (76)

g. 動詞の後。

étaient/acheminés (21), qui est/aide-comptable (94), on ne doit/absolument pas (98), on devrait/accorder (98)

h. mais の後。

mais/enfin (19), mais/aussi (21), mais/ils ne veulent pas (26), mais/une chaussure (70), mais/en travaillant (108)

i. 接続詞 quand の後。

この 1 例のみ。

quand/on a commencé (21)

j. c'est (c'était) の後。

c'est/impossible (75), c'est/une somme (76), c'était/intéressant (113), c'était/une ville (93)

4. まとめ

リエゾンを起こす要件は複合的なものであって、語末に無音の子音字があり、母音が後続するといった条件だけでは、リエゾンは起こらない。語間の結合度、語間にリズム段落があるかどうか、言語レベルの差異（改まっているか、くだけているか）、などによって左右される。

本稿でも観察したように、一般的に言って、語間の結合度の高いものは、リエゾンが起きやすい。たとえば、名詞句の中で、「限定詞＋名詞」、「限定詞＋形容詞＋名詞」は、典型的に、語間の結合度が高く、朗読ではもちろんのこと、日常会話でもリエゾンが行われる（朗読：Tous les_hommes, comme un petit_enfant、会話：des_appartements, grands_ensembles, etc.）。

「副詞＋形容詞（過去分詞）」も結合度が高いといってよいだろう。ここでも、朗読でも日常会話でも、リエゾンが行われる（朗読：très_utile, bien_obéi, 会話：très_étendus, plus_élevé, etc.）。

「主語代名詞＋動詞」、「補語代名詞＋動詞」も結合度が強い場合である。これも朗読でも日常会話でもリエゾンが起こるケースである（朗読：vous_imaginez, on_exige, il les_interroge、会話：nous_avons, pour les_obtenir, etc.）。

「接続詞 quand の後」も、朗読と会話においてリエゾンされる場合である（朗読：quand_il aperçut、会話：quand_on est jeune, etc.）。ただし、これには、会話でたった1例、リエゾンしていない例があった（quand/on a commencé）。これは通常リエゾンする場合であり、日常会話では、このようなゆれがあることをしめす例といえよう。

「成句・熟語」の場合も、朗読・会話ともにリエゾンをしていて例外はなかった（朗読：tout_à fait、会話：peut-être, etc.）。

次に、リエゾンにゆれがある場合をまとめてみると、まず「動詞の後」がある。動詞の後には、冠詞・前置詞・副詞・不定詞などさまざまなものが後続するが、朗読でリエゾンするからといって、会話でリエゾンするとは限らない（朗読：Je suis_un renard、会話：je suis_allé voir, étaient/acheminés, etc.）。

次に「c'est の後」がある。C'est に後続する要素も多様で、冠詞・形容詞・副詞・代名詞などであるが、これも朗読ではほとんどつねにリエゾンされるとはいえ、会話では、リエゾンされることもあれば、されないこともある（朗読：c'est_un avion、会話：c'est_une région, c'est/une somme, etc.）。

ところで、朝倉季雄は以下のような例を引いて、pas の後では、リエゾンする場合としない場合があることを指摘している¹²⁾：

- a) Et ils n'en pensent pas_un mot. (Clair, *Comédies*, 70)
- b) Vous ne comprendrez jamais/une chose, c'est qu'il le fait exprès, Madame Desbaresdes. (Duras, *Moderato*, 69)

朝倉はこれらの例に関して、a) では un が数詞と解され、リエゾンが起こるが、b) では、数詞とは解されず、リエゾンも行われないと述べている。しかし、実際には、日常会話であっても、「pas + 数詞」がリエゾンを起こしていない場合がある。それは、il y a pas/un chat (*Orléanais*, 35) である。このように、日常会話では、リエゾンするはずの箇所でも、リエゾンされないということが起こりうる。しかし、このような例は 1 例だけであるので、もっと例を集めるなり、インフォーマントに尋ねるなりして、このような点をよりくわしく検討する必要があるであろう。

以上、朗読と日常会話におけるリエゾンの一端を観察することによって、語間の結合度がリエゾンに深く影響を与えていることを見てきたが、語間の結合度だけが決定的要素ではないのは、3.3. で見たとおりである。そこには、心理的要素が介入していて、改まったものか、くだけたものかといった言語レベルが関係してくるのである。どのような発話状況か、あるいは発話者と対話者の人間関係といった要素については、また今後の課題としたい¹³⁾。

註

- 1) 『新英語学辞典』研究社、1982 年、1070 頁。
- 2) Marc Wilmet, *Grammaire critique du français*, (Paris : Duculot, 1997), 37.
- 3) Jean Dubois et al., *Dictionnaire de linguistique*, (Paris : Larousse, 1973), 299.
- 4) 新倉俊一ほか『フランス語ハンドブック』白水社、1978 年、436 頁。
- 5) 朝倉季雄『新フランス文法事典』2002 年、289 頁。
- 6) neuf [nœf] の [f] が [v] と発音される場合をリエゾンに含んでいるものは、結構ある：Maurice Grevisse, *Le Bon Usage*, (Paris-Gembloux : Duculot, 1980), 70 ; Michel Arrivé et al., *La grammaire d'aujourd'hui*, (Paris : Flammarion, 1986), 379 ; Martin Riegel et al., *Grammaire méthodique du français*, (Paris : PUF, 1998), 55 ; 新倉俊一ほか『フランス語ハンドブック』白水社、1978 年、436 頁；日本音声学会編『音声学大事典』三修社、1976 年、801 頁；佐藤房吉ほか『詳解フランス文典』駿河台出版社、1991 年、23 頁、など。
- 7) 佐藤房吉ほか『詳解フランス文典』駿河台出版社、1991 年、23 頁。
- 8) Henri Bonnard, *Grammaire française des lycées et collèges*, (Paris : Société universitaire d'édition et de librairie, 1950), 203.
- 9) 目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2000 年、21 頁。
- 10) 大木充、東郷雄二『目で見えるフランス語発音入門』駿河台出版社、1989 年、24 頁。
- 11) 中田俊介「フランス語韻律句の音調・リズム構造について」日本フランス語学会第 256 回例会発表のハンドアウト、2009 年 6 月 27 日。
- 12) 朝倉季雄『フランス文法論 探索とエッセー』白水社、1988 年、43 頁。

- 13) なお、本稿では、リエゾンの起きる規則や、リエゾンの禁止の場合を網羅的にあげることはしなかったが、この点に関しては、上記の文法書・参考書、および次の書目を参照されたい：青井明「リエゾン」『音声・音韻ハンドブック』勉成社、近刊。